七ヶ浜町文化財調査報告書第３集

大木囲貝塚

—昭和49年度環境整備調査報告—

宮城県宮城郡
七ヶ浜町教育委員会

序

大木囲貝塚は昭和43年３月18日国の史跡として指定告示され、直ちに昭和43年度より用地の買収を開始したが、当貝塚は日本有数の大貝塚で、その面積は、187,163.40㎡あり、地権者は50数名にのぼり、その買収には少なからず困難をきわめたが、昭和46年２月先行投資によりほぼ全面的に買収した。

しかるに用地買収後指定区域内の耕作は認められないので全域に雑草、雑木繁茂密生し、史跡としてみるかげもない状態となった。この貴重な埋蔵文化財を保護し活用をはかるため、史跡公園として環境整備を行なうこととなり、国庫補助、県費補助をうけ、昭和47年度より開始し本年は第３年度であり、環境整備全体計画の中の苑路一部造成及び本年度苑路造成予定地の事前調査、植栽工事、沼地地帯の境界線に沿って堤防を築く予定地の地質調査を行った。その成果をまとめ報告書第３集として発刊するものである。報告書の作成にあたり予算の都合上、ページ数を制限せざるをえなかった。編集者である調査員八巻正文氏の努力に感謝いたします。

本報告書によって大木囲貝塚の価値を多くの人々に理解していただき、更に研究者の方々の参考となれば幸甚である。

なお、この環境整備事業並びに報告書作成に当って懇切に指導下さった文化庁の安原啓示氏、東北大学名誉教授伊東信雄氏並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚の感謝を捧げます。

七ヶ浜町教育委員会教育長　山　家　　正

大木囲貝塚環境整備指導委員

伊　東　信　雄	東北大学名誉教授	考　古　学
岡　田　茂　弘	宮城県多賀城跡調査研究所所長	考　古　学
加　藤　　孝	東北学院大学教授	考　古　学
興　野　義　一	医師	考　古　学
佐々木　嘉　彦	東北大学教授	建　築　学
丸　田　頼　一	千葉大学助教授	造　園　学
芹　沢　長　介	東北大学教授	考　古　学

目　　次

Ⅰ．調査概略……八巻　正文……1頁
Ⅱ．植生調査……3
Ⅲ．中世の貝層……4
Ⅳ．第２号住居跡……6
Ⅴ．土器……9
Ⅵ．土偶……11
Ⅶ．鳥骨……11
Ⅷ．魚骨……八巻　正文　阿刀田裕子……12
Ⅸ．石器・石製品……千葉　英一……17
Ⅹ．オロッコの家族と小屋……納谷　忠久……19

挿　図　目　次

１．植生調査中の中条先生……3頁
２．ＥＦ35地区土層断面図……5
３．第２号住居跡ＢＭ53地区断面図……6
４．大木２式土器形態……9

図　版　目　次

Ⅰ．大木囲貝塚の位置…… 23
Ⅱ．昭和49年度調査地区図…… 24
Ⅲ．苑路線の変更…… 25
Ⅳ．小舌状台地上の小穴群、実測図…… 26
Ⅴ．大木囲貝塚第２号住居跡、実測図…… 27
Ⅵ．大木囲貝塚第２号住居跡及び住居跡出土遺物、写真…… 28
Ⅶ．手作りの標識、写真…… 29
Ⅷ．大木２式土器実測図…… 30
Ⅸ．大木２式土器写真…… 31
Ⅹ．大木３式土器実測図、写真…… 32
Ⅺ．Ａ、大木３式土器実測図、写真…… 33
　　Ｂ、大木２式期の土偶…… 33
Ⅻ．大木囲貝塚出土の鳥骨、描画…… 34
XIII．大木囲貝塚出土の鳥骨、描画…… 35
XIV．マダイの骨格、描画…… 36
XV．マダイの骨格、描画…… 37
XVI．大木囲貝塚出土、魚骨、骨格器、石器写真…… 38
XVII．大木囲貝塚出土石器実測図…… 39
XVIII．大木囲貝塚出土石器実測図…… 40
XIX．大木囲貝塚出土石器実測図…… 41
XX．大木囲貝塚出土石器実測図…… 42
XXI．旧日本領樺太付近のオロッコの家族と小屋…… 43

Ⅰ．調　査　概　略

A．調査関係者

調査責任者　伊東信雄（東北大学名誉教授）

調査員　八巻正文（七ケ浜町教育委員会嘱託）

参加学生　千葉英一（東北大学大学院）、松井　章、森口ますみ（以上東北大学考古学科３年）井上真理子、渋谷孝雄（以上東北大学研究生）、阿部輝子（東北学院大学）、薄葉則子（宮城学院女子短期大学）、和田尚子（杉野女子大学）

作業員　阿部はるえ、石井みえ子、佐藤京子、佐藤鋼治、佐藤捨松、佐藤とみこ、佐藤とめよ佐藤文子、佐藤ミノル、鈴木うん、鈴木けさの、鈴木とめ、我妻エイ子、渡辺むめよ

協力　会見多賀子（石巻赤十字高等看護学院学生）、阿刀田裕子（明治大学学生）、後藤勝彦（宮城県塩釜女子高等学校）、佐藤武夫（七ケ浜町東宮浜字要害）、支倉敦子（宮城県立保母専門学院学生）、宮澤真弓（宮城学院女子大学学生）

協力機関　文化庁記念物課、宮城県教育庁文化財保護課

指導　芹沢長介（東北大学教授）

B．大木囲貝塚の位置（図版Ⅰ）

北緯38°17′58″から18′15″の間、東経141°2′36″から3′3″の間。

地籍は宮城県宮城郡七ケ浜町大字東宮浜字東大木、西大木、北下方、南下方の四つの小字にまたがる。

25,000分の１地形図「しおがま」

C．調査の目的

苑路造成の際、遺構を破壊しないようにあらかじめ遺構確認調査を行う。なお単に苑路造成のために調査するのでなく、大木囲貝塚では住居跡の保存展示計画、縄文時代の住居の復元が計画されているので、住居跡が発見された場合にはそれらの計画の資料とする。

D．地区設定（図版Ⅱ）と層位

史跡全域を方眼に地区割した。海に向って舌状につき出ている丘の標高の高い線に縦軸を設けた地点に基準の石標を設置した。この縦軸を３ｍ単位でくぎり、南から北にアルファベットＡ～Ｔの記号を付ける。これだけでは60ｍにしかならない。そこでさらにその上の単位として60ｍごとにＡ．Ｂ．Ｃ．……の記号を付ける。縦軸に直交する横軸も３ｍ単位で区切り、記号として数字を東から西に１～99を３ｍごとにつける。しかしこれだけでは史跡全域をおおうことができない。そこで東部地域には最初にＥを冠し、西部地域にはＷを冠することとする。例えば

西部地域の地点、区はWFA00のように表わす。

石標は北のものをFA70、南のものをCA70地点とする。

3×3mの小地区の中をさらに区分する場合にはアルファベットの小文字をつかいその区の範囲を平面図に記録する。例えばCF41aのように表わす。

層位を表わす場合には各地区ごとに上から大きく1.2.3.…層ととらえることとし、各層にさらに細い層がある場合にはアルファベットの小文字を使い、ごく1部分にしかみられない場合にはイロハ…を使う。したがって地区、層を続けて表わすとCF41L2bのごとくである。

E. 経過及び結果（図版II）

苑路の予定線は昭和48年度に作成した全体計画図では図版IIIの第1次計画路線のようであった。しかしその路線では貝殻や土器片があまり見学者の目にとまらないので苑路をつくる意味がないという意見が指導委員会で出され図版IIIの第2次計画路線のようにした。この路線なら歩いていて貝殻の散布状況を見ることができ、しかも埋蔵貝層の上ではない。ただし土盛してつくるよう指導があった。

しかしこの路線になるとEC36区付近の小舌状台地及びCA41からBK64区までの環状貝塚内部には、住居跡等の遺構があると考えられたので調査を行なった。その結果EC36区付近からは多くの柱穴と思われる遺構が現われた。またBK51区からBK64区では表土を剝ぐやいなや大木2式の包含層が現われたのでBK51区からBK64区の上に苑路をつくることは不適当と判断したので、さらに付近を検土杖により調査し、表土剝ぎを行い遺構確認調査を行った。その結果BN52区付近で住居跡が発見された。調査の結果により苑路は図版IIIの第3次路線に決定された。

さて苑路造成が始ってみると工事は遺跡を削って行われた。設計図をみせてもらったところそのように設計されていることがわかり、工事の中止を要請し、指導委員会も苑路の設計変更をするよう指導した。しかし工事は一時中止されたものの設計変更されないまま再び行われたため緊急調査をせねばならなかった。かくして苑路の設計上どうしても深くまで削られるので調査した地区は、CC41、42、CD41、CE41、42、CF41、42、CG41、CH41、42、CI41、CJ41、CK41、CL41、CR41、DC40、41、DD40、41、DN39、DO38、39、DP38、39、EF35、EG35、EH35区である。これらの地区の層は再堆積層がほとんどで、層位的に良い資料は少なかったが、土器の量は非常に多かった。（八巻正文）

II. 植　生　調　査

A．調査の目的

大木囲貝塚では環境整備の一環として植栽を行う予定である。植栽は防災、地面保護、遮蔽美観、緑地保護育成、休養等を目的として行うが、大木囲貝塚では特に縄文時代人の生活とかかわりの深い植物を植える計画である。植物には説明板や名札をつけ、将来はその植物をつかって縄文時代の生活を再現するなどして学校教育、社会教育、研究に活用する計画である。なお植栽はできるだけ現在史跡内にはえている植物を活し、史跡内にない植物のみ購入する。また全地区を人工管理するのではなく、自然放置区、半自然区、人工管理区に分ける。それには現在大木囲貝塚にある植物の種類をしらべ、植生を調査する必要がある。

B．調査経過

現生植物の調査は昭和48年度から実施され、中条　幸先生によってすでにその一部が報告されている。中条　幸　1974（昭和49年）　史跡「大木囲貝塚」の植物（第一次調査報告）　36 pp.　8 pls. 宮城県七ケ浜町教育委員会

昭和49年度も先生に調査、資料の整理、報告書作成をお願いしたが、過労のため病気になられ入院されたため、報告書を作成するまでに至らなかった。　（八巻正文）

図Ⅰ　植生調査中の中条先生

Ⅲ. 中　世　の　貝　層

調査地区はDT36、37、EA36、37、EB36、37、EC36、37、ED35、36、37、EE35、36、EF35、36、EG35、EH35。(図版Ⅳ)

昭和47年度の埋蔵貝層分布調査（福田友之1973　pp. 19－20）により、この小舌状台地上には何らかの遺構があると考えられた。

表土をはいでいくとDT～EC区では５～20cmで地山があらわれ、柱或は杭跡のような小穴がいくつか認められた。穴は口径10～40cmの小さいものがほとんどであり、１つだけDT37区に口径130cmのやや大きい穴があった。

EE35L２からは馬歯が出土した。

これらの小穴群、馬歯に伴出する土器は縄文式土器しかみられず、当初小穴群も馬歯も縄文時代のものかと思われた。

しかしEE36、EF35区から出土した貝殻の中にハイガイが含まれておらず、大木囲貝塚の縄文時代前期中期の貝層と比較して同じ時代のものとは考えられなかった。そこで貝殻のＣ－14年代の測定を依頼したところ、以下に述べる通り、縄文時代のものでないことが明らかとなった。

EE36aL２出土のカキ、アサリ、480±75y.B.P.(A.D.1470)、N－2570、半減期5730年

EF35L４a出土のマガキ、760±90B.P.(A.D.1190)、TH－182

馬歯が出土したEE35L２層はEF35L４層とつながる層であり、上述のＣ－14年代測定の結果により、この馬歯を縄文時代のものと断定することはできなくなった。したがってこの馬歯の時代をきめるには、各時代の馬歯とくらべてみなければならない。

また小穴群もEC36、ED35、37区ではEE36aL２EF35L４層とつながる黒褐土におおわれており、縄文時代の遺構と断定することはできない。

以上のように縄文式土器しか含まず、しかもかなり厚い層であっても、縄文時代に堆積したものでない場合があり、注意を要する。特に珍しい動植物、人工遺物、遺構が出土した場合、いろいろな観点から十分検当する必要がある。

なおEF35区は階段構築に先だち深くまで調査したので層序記録を次頁に掲げる。

（八巻正文）

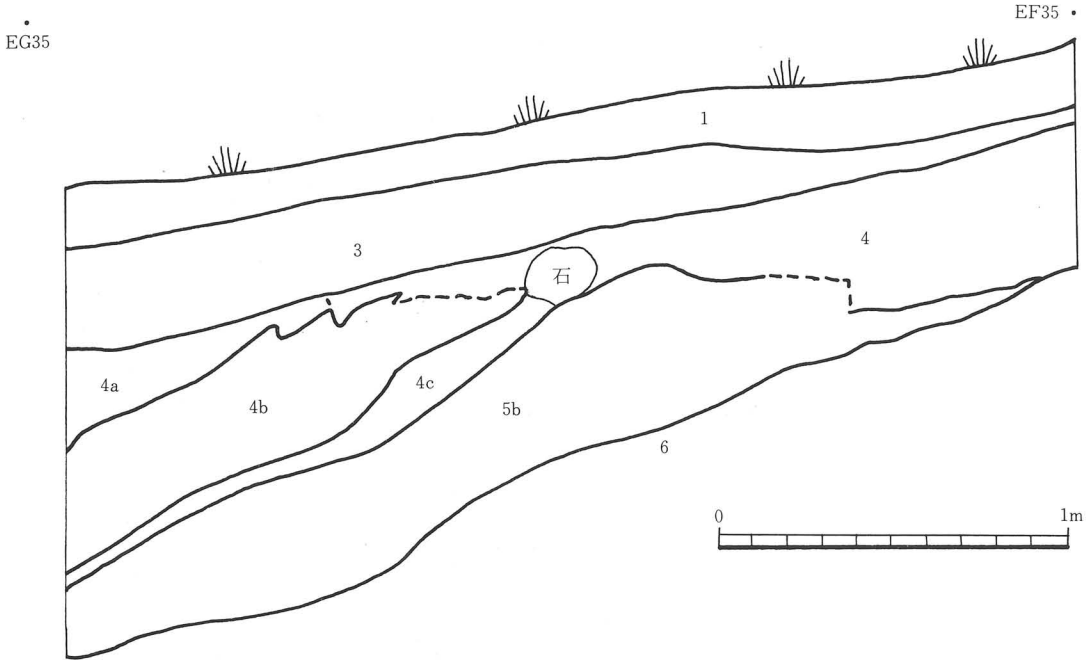


図2　EF35地区土層断面図

EF35区　土層断面

層序	厚さ cm	土　色	堅密度	含　有　物	その他	出土土器型式
1	10～20	褐	堅			不　明
3	5～30	暗　褐	堅			大木8a、8b、9
4	5～40	黒　褐	粗			不　明
4a	5～30	黒　褐	粗	貝多し		大木8a
4b	40	黄　褐	堅	凝灰岩粒多し		大木7a、8b、9
4c	5～15	黒　褐	粗	貝を少し含む		不　明
5b	50	黄　褐	堅	凝灰岩粒多し、この層まで土器を含む	漸移層	大木2b、6、7b 8a、8b、9
6		明黄褐	堅	凝灰岩粒多し、土器なし	地　山	

Ⅳ．第２号住居跡（図版Ⅴ、Ⅵ）

出土地区はBM51、52、53、BN51、52、53、BO51、52、53、54にまたがる。

今回の調査では住居跡の範囲を確認したに止まり、BM54、BN54地区は他の地区の調査の結果住居跡の範囲に入ることが確実なので表土をわずかに剝いだ段階で発掘を中止した。図中点線の部分は未発掘の黒褐土の部分である。

表土を剝ぐや、まもなく地山が現れ、炉の石の一部は耕作土中にあった。竪穴の壁はBM53区でその立上がりをどうにか確認することができた。このBM53区の壁の立上がりの位置における層序断面図及び層序は以下のごとくである。

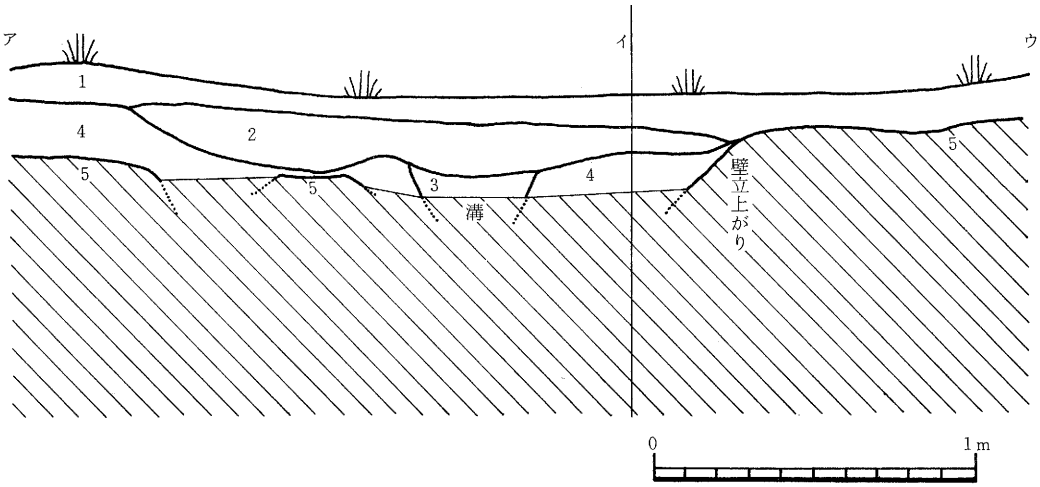


図３　第２号住居跡 BM53地区断面図

BN53－BM53－BM54土層断面

層序	厚さcm	土　色	堅密度	含有物	出土土器型式
1	5～15	褐　10YR 4／4	堅		大木2b
2	15	黒褐　10YR 2／1	堅	炭　土器の粒 凝灰岩（10mm以下のもの多し）	大木1、2a、2b、5、6、8a、8b、9
3	＞5	にぶい褐色7.5YR 4／3	粗	骨片　土器の粒 凝灰岩粒は上層よりは少い	大木1、2a、2b、8b、9
4	15	黒褐　10YR 2／3	すこぶる堅		大木1、2a、2b、6、8b、9
5		黄橙　10YR 7／8	すこぶる堅	凝灰岩	

住居跡の平面の形はほぼ円形で、直径は周溝の外側端からはかると最長部で９ｍもある。

壁の立上がりはBM53区でわずかに認められた。もとの壁の高さ及び竪穴をほり込んだ層は不明である。

周溝は一部とぎれている。周溝のところどころに小穴がある。BM53区は主柱の位置及び壁の立上がりを一部の発掘で確認したに止まり、周溝は追求しなかった。

床は保存状態が悪く、遺物も少なかった。

炉は石囲炉で、石及び炉内部の土は赤く焼けている。炉の石の大部分が表土近くにあり、その上調査中に盗掘にあい、もとのままの石は図に見るようにごくわずかである。炉の位置は竪穴のまん中にあるのではなく、やや北に片寄っている。

主柱の跡と考えられる穴はBM52pit 1、BM53pit 1、pit 2、BN52pit 1、pit 3、BN53pit 1、pit 2、BO53pit 4である。深さはBM53pit 2が14cmで浅いが、他の柱穴の深さは30～45cmある。柱穴は柱の太さと同じくらいの大きさに穴を掘ったようで、掘り方と柱痕の区別ははっきりしなかった。なお柱穴は完掘せず断面観察のためBM52pit 1のように半分のみ調査したものもある。

出土土器は破片ばかりで埋甕はなかった。土器型式は、第2層（黒褐色土）以下地山への漸移層及び周溝・柱穴の中にはいずれも、大木1、2a、2b、8b、9式が主で、他に少量大木3、4、5、6、7b、8a式土器が出土した。

石器は少く、石鏃4点、石匙2点、スクレイパー3点、石斧1点、剝片18点、2次加工痕ある剝片1点、欠損により器種不明の石器4点である。出土土器が大木1～9式に及んでおり、石器も1時期のものではない。BN53区には大きな石がある。90×65cmで地山からの高さは30cmある。加工痕はないが、住居が営まれた当時は何らかに使用されたことであろう。

竪穴住居の外には浅いくぼみがみられる。人工か自然か不明であるが、排水に適当である。

考　察

住居の主軸を求めると図のようになる。BM52pit 1とBN53pit 1の中点、BN52pit 3とBN53pit 2の中点、BN52pit 1とBO53pit 3の中点、これらの中点を結んだのが図の主軸線である。この主軸を図に入れると、BM53pit 1とBM53pit 2が主軸に対称となるし、炉も主軸にちょうどのっており、炉の北にある浅いpitも主軸にのり、対称に見える。主軸の方向は環状貝塚の中央を向かず、ほぼ現在の南北方向を指しており、北方には入江がみえる。

柱穴を当時どのようにして掘り、どのようにして柱を立てたのであろうか。環境整備の一部として手製の標識をつくったが、標識を立てる作業は掘立柱をたてるのと同じで、竪穴住居の柱穴と比較することができた。図版Ⅶ－Bの標識の場合、柱の太さにあわせて穴を掘った。穴の口が広いと柱を立てた時、土でかためてもぐらぐらする。穴は長さ150cm、太さ3cmの鉄の棒で穿った。この鉄の棒は一方の端が平になっており、他方はやや尖がっている。このように幅のせまい刃先のもので掘っていけば、穴を柱の太さ形と同じように掘ることができる。柱を穴に立てるとわずかにすきまができる。すきまに土砂、砂利などを入れて柱をゆすり、さらに棒で

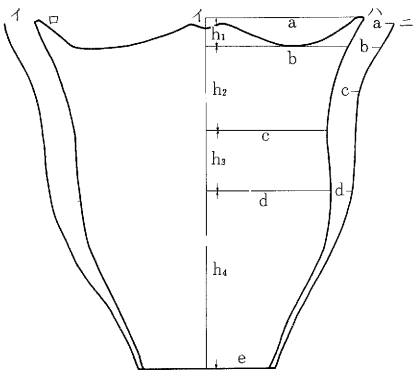
突く。図版Ⅶ－Ｃの標識の場合、柱の太さは根本が30cm、末が20cm、長さが360cmある。材は杉で伐り倒してから２ケ月乾燥させ軽くし４人がかりで立てるところまで運んだ。次に柱が土に埋まる部分を火でこがしてから標識に組立てた。柱を立てる穴は一方に斜に溝をつけ柱がすべりこみやすいようにした。柱を穴にすべり込ませた時穴の壁に柱の根本がくいこまないよう穴の壁に板を立てた。組み立てた標識はかなりの重さで５人がかりで穴に柱をすべり込ませようやく立てることができた。（八巻正文）

V．土　　器

今年度の調査では表土及び再堆積層の資料が大部分で、層位的に良い資料はほとんどなかった。資料の整理は未だ不十分で、ともかく後で誰でもが資料として使えるように土器片に出土した地区・層序の記号を書き入れることだけは終了したが、土器の復元作業はごく一部行われたにすぎない。したがってここでは復元した完形品について述べる。

図版Ⅷ、Ⅸ－BK59L１、L２出土。大木２式、胎土には石英等の砂粒及び繊維を含む。径６mmの礫も含まれ、長径12mmの礫が抜け落ちた跡や根の焼け跡と思われる凹みもみられる。採取したままの土よりは小石や木の根は少いので、土を練りながら目についた小石等をとり除いていったと考えられる。底には木の葉痕、網代痕はなく磨きもみられない。器壁は９～11mm。器形は口縁部が外反し、胴部がややふくらむ深鉢形であるが正面と側面では図４に示すように側面の方がやや外に開いている。土器の各部位における半径及び高さは以下の通りである。

	正　　面	側　　面
a	16.3cm	19　cm
b	15	18.1
c	12.5	15.4
d	12.9	14.7
e	6.4	7
h_1	2.8	2.4
h_2	9.9	5
h_3	6	10.5
h_4	17.5	17.5
H（器高）	36.2	35.4



正面（ロ－ハ）と側面（イ－ニ）で形態がいくぶん異る

図４　大木２式土器形態

口縁部は富士山のような形をしている。残存する山形の口縁部は１つであるが、口唇部のそり具合から、山形の数は４つあると判断した。縄文は羽状縄文で横方向にころがして施文している。この羽状縄文はRlとLrの縄を掛けの留めにし、次にそれぞれLR、RLに撚ったものである。縄文帯の巾は３～４cmであるが、これは原体の長さではなく、縄に指を２・３本あててころがした結果と考えられる。きれいに羽状になっている部分は少なく縄のLR、RLどちらか一方に指をあてて施文した部分が多い。口縁部には３本の沈線文がある。沈線の幅は６mmで浅く、底部には竹べらの維管束と思われる細いすじが数多くみられる。この沈線文は縄文を切っており、

縄文を施文したのち沈線文をえがいたことがわかる。器内面は横方向に磨きが施されている。色は一様ではなく、外面は橙、灰褐、灰黄、暗灰色、内面は橙、灰黄、灰色である。口縁部に小さな円い穴があけられている。この穴が土器焼成前にあけられたものか、焼成後にあけられたものかは不明である。このような穴を補修孔と呼ぶことがあるが、焼成前に穴をあけている例がみられるので補修孔と呼ぶのは適当でない。

図版Ⅹ－CF42L４a、L５b出土、大木３式、胎土には砂粒や径５mmの小礫も含まれている。前述の大木２式の土器にくらべると少いが、繊維が入っている。底には木の葉や網代等の圧痕はなく磨きも見られない。器の裾は張出している。器内面の下半分は縦方向になでられ、上半分は器に水平になでられている。器外面の胴部は縦方向になでられている。器壁の厚さは６～11mm。口縁部の突起は三角形をしていて直立している。残存する突起は１つであるが、突起のある部分はその下部がやや内弯しており、このことから突起は４つあったと考えられる。器形は深鉢形で各部位における半径及び高さは以下の通りである。単位はcm。a＝8.2、b＝8.5、c＝7.7、d＝3.4、e＝4.1、f＝3.3、h_1＝1.6、h_2＝1.5、h_3＝11、h_4＝２、h_5＝0.6、H（器高)＝16.7。口縁部には幅４cmの半截竹管による沈線文がある。沈線によって三角形にかこまれた内部には半截竹管による刺突文がほどこされているが、一部刺突文がない部分がみられる。器面のみがきは内面上部に認められる。色は底部が灰褐色、胴下半部が明赤褐色、口縁部が灰褐色、突起が黒褐色、内面は黒色である。

図版Ⅺ－Ａ、CF42L５c、L６a、L６b、L６e、L７h、CG41L４出土。。大木３式土器。胴部下半分欠失。胎土には石英粒が多く、わずかであるが繊維が含まれる。器壁の厚さ11mm、器形は深鉢形で口径30.5cm、縄文RLの縄を器体に水平にころがし、次に口縁部に沈線文をえがいている。沈線は幅７mmほどで竹べらの維管束のあとと思われる細いすじがみられる。内面は器体と水平にけずり及びみがきが施されている。色は灰、暗灰、紫灰、にぶい橙色等がみられる。

（八巻正文）

Ⅵ. 土　　偶

図版Ⅺ－B、BK53L 2出土。伴出土器は大木2a式19片、大木2b式23片、大木3式1片。大木6式1片、型式細別不可の繊維土器190片。胎土には繊維がたくさん含まれている。板状土偶で厚さは18～24mm。腕及び胸に沈線文がある。沈線は平べったく幅5mm、へらの維管束痕がみられる。時期は大木2式期と考えられる。　（八巻正文）

Ⅶ. 鳥　　骨（図版Ⅻ、ⅩⅢ）

鳥骨の種の査定を国立科学博物館の長谷川善和先生に依頼した。長谷川先生によれば鳥の研究者にもみていただいたが、骨による種の分類は非常にむずかしく、早稲田大学の金子浩昌先生にもみていただき、種を検当した由である。

出土した鳥骨の種は次のとおり。

オオハム

アホウドリ

ウ類

ヒメウ

カモ類

キジ類

（八巻正文）

Ⅷ. 魚　　骨

A．骨格の各部名称　図版XIV、XV

出土した魚骨を整理するには、まず骨格の各部名称を知らねばならない。大木囲貝塚ではマダイの骨が多いので、今後の調査に役立つよう現生マダイの骨格標本を用い各部名称を検当した。名称は主に川村久治郎1914を参考にし、他に一部日本大学水産学会1958、赤崎正人1962、George C. Kent1973, Romer, A. S. and Parsons, T. S. 1977を参照した。なお最近の研究によって骨格の各部名称はいくつか変更せねばならないようであるが、このことについては上野輝彌1975を参考されたい。

頭　骨　Skull

(1)　頭蓋骨　Cranium

1．Vomer
2．Ethmoid
3．Prefrontal
4．Frontal
5．Sphenoid
6．Parietal
7．Epiotic
8．Supra occipital
9．Pterotic
10．Exoccipital
11．Basioccipital
12．Parasphenoid
13．Basisphenoid
14．Prootic
15．Alisphenoid

(2)　眼面骨　Ossa faciei

鰓蓋を構成する骨

16．Preopercular

17. Opercular

18. Subopercular

19. Interopercular

眼窩を構成する骨—以下の名称のほかLacrimal, Postorbitalsなどがつかわれている

201. Preorbital

202. Preorbital

21. Suborbital上野輝彌1975pp. 215－217では眼下骨はinfraorbitalとしている

22. Supraorbital

23. Nasal

(3) 顎骨 Bone of jaws

上顎を構成する骨

24. Premaxilla

25. Maxilla

26. Palatine

27. Entpterygoid or pterygoid

28. Mesopterygoid

29. Metapterygoid

30. median rostral bone（日本大学水産学会1958pp. 114－115による）

下顎を形成する骨

31. Mandibula or Dentary

32. Articular（上野輝彌1975 p. 217ではAngular）

33. Angular（上野輝彌1975 p. 217ではRetroarticular）

下顎支持骨として

34. Quadrate

35. Symplectic

36. Hyomandibula

(4) 舌骨　Hyoid bone

37. Glossohyal

38. Basihyal

39. Ceratohyal

40. Epihyal

41. Interhyal

42. Urohyal

43. Branchiostegal rays

(5) 鰓骨　Branchial skelton

下鰓弓骨の部

44. Basibranchial

上鰓弓の部

45. Hypobranchial

46. Ceratobranchial

47. Epibranchial

48. Upper pharyngeal

49. Lower pharyngeal

付属

50. Gill raker

脊椎骨　Vertebrae

脊索Notochordの痕跡を有す

(1) 胴部脊椎骨　Trunk　10個

51. Atlas

511. Transverse process

512. Dorsal rib

52. Axis

53. 3 vertebra

533. Ventral rib

54. 10 vertebra

(2) 尾部脊椎骨　Tail　14個

55. 11 vertebra

56. 12 vertebra

57. 22 vertebra

58. 24 vertebra

尾部の骨はごく最近になって詳細な研究が発表された。このことについては上野輝彌1975、pp. 188－189、216－218を参考にされたい。なお以下に述べる尾部の骨の名称については赤崎正人1962、pp. 60－61を参照した。

591. Urostyle

592. Specialized neural process

593. Uroneural spine

594. Epural bones

595. Hypural bones　1 ～ 6

596. Bony spur

付属骨　Appendicular skeleton

(1) 偶鰭　Paired fin

肩帯骨及び胸鰭　Shoulder girdle and pectral fin

60. Supra temporal

61. Post temporal

62. Supra clavicle

63. Clavicle

641. Scapula

642. Scapula foramen

65. Coracoid

66. Inter clavicle

67. Post clavicle

68. Basal element of fin

69. Radial elements of fin

70. Pectral fin ray　15本

腰帯骨及び腹鰭　Pelvic girdle and ventral fin

71. Pelvic girdle

72. Radial elements of fin

731. Spine of ventral fin

732. Pelvic (Ventral) fin

(2) 奇鰭　unpaired fin

背鰭支持骨及び背鰭　Supports of dorsal fins and Dorsal fins

74. Spurious inter neural

75. Basal fin supports (Inter neurals)

76. Radial elements of fin

77. Dorsal spines

78. Soft dorsal fin ray

殿鰭支持骨及び殿鰭　Supports of anal fin and Anal fin

79. Inter hemal spines

80. Radial elements of fin

81. Anal spines

82. Soft anal fin ray

83. Caudal fin

B. 魚　種　図版XVI

今年度の調査では自然遺物の良い包含層がなく、新たに種の査定のできた魚骨も少い。土層サンプルに含まれている小さな魚骨を水産庁東北区水産研究所の堀田秀之博士に見ていただいたがなお不明である。種を査定できた魚骨次の通り。

ヒラメ

種の査定は北海道大学の尼岡邦夫博士。Premaxillary, Dentary, Articular（発生学的研究により最近Angularと名称が変更された)、Hypuralの各骨がヒラメと同定された。参考文献は疋田豊治　1934 、金　容億　1973 。

（八巻正文　阿刀田裕子）

Ⅸ　石器・石製品

今年度の調査によって出土した石器は、表土や再堆積層から得たものがほとんどで、ある1つの型式の土器とともに出土したのではない。それゆえここでは各地区出土の石器を一括し、代表的なものを報告した。

1．石器製作参考資料

石核　図版 XⅦ－1、2、14

未成品或は失敗品　図版 XⅦ－15（石鏃の失敗品或は石錐の基部か）、16

擦切石斧　図版 XⅦ－5

2．再加工品

図版 XⅦ－9　石斧が折れたため刃を打割により調整し再利用したもの。

図版 XⅦ－10　もとの長さ8cmの縦長の石匙だったものが半分に折れたため、つまみのついたほうを再利用しようとして割れ口を調整したもので、どちらも同じ発掘地区及び層から出土した。

3．各種石器

石鏃　大きさを単位mmで（縦軸×横軸×厚）の順序で示す。図版XⅨ 図版XX－38、39（19×13×4）、40（34×16×6）、41、42、43（30×15×4）、44（20×14×3）、45（42×15×4）、46（34×23×4）、47（20×16×3）、48（41×18×4）、49（47×17×4）、50（29×18×6）、51（19×16×3）、52、53（31×18×4）、54、55（30×12×3）、59（23×12×5）、62（25×9×3）

石槍　図版XX－57、長さ72mm、幅18mm、厚さ7mm、重さ11g、図版XⅥ－66　長さ122mm、幅21mm、厚さ8mm、重さ20g

石錐　つまみのあるもの（図版XX－60、63、64）と、つまみのないもの（図版XX－58、61、65）とにわけられる。

石匙　縦長のもの（図版XⅦ－10、図版XⅧ－23、29）と横長のもの（図版XⅧ－19、22、24）とがある。いずれも片面に大きな剝離面が残されている。

スクレイパー　図版XⅧ－17、18、21、26、27、31、32、34、35、36　いずれも片面に大きな剝離面が残されている。

エンドスクレイパー　図版XⅧ－25、30　石篦とよばれるものである。

ピエス・エスキーユ　図版 XⅧ－28、33、37　平面はほぼ長方形、数辺に両面から剝離がほどこされており、あい対する２辺に細い剝離が加えられている。

磨製石斧　図版 XⅦ－３、４、５、７、８、９、11。図版 XⅦ－５は小形で上部が欠失しているが、穴があけられていたことがわかる。

石皿　図版 XⅥ－68　砥石としても使用されている。

４．石製品

小玉　図版 XⅦ－６　灰白色の地に緑灰色の斑点がある。両面ともよく磨かれている。

玦状耳飾　図版 XⅦ－12　破損品。灰オリーブ色で光沢なく美しい石ではない。形は円形に近い。　（千葉英一）

X　オロッコの家族と小屋

この写真は（図版XXI）「旧日本領樺太国境付近のオロッコの家族と小屋」である。

オロッコ人はアジアの古民族で今日ではシベリアの一部と樺太に住んでいる数少ないツングース系の一派である。彼らは満州語に類似のオロッコ語を使用し独自の伝統的な文化を今もなお保持している。オロッコは自称「ウィタ」、露人は「オロチョン」、アイヌは「オロッコ」と呼び、和人も「オロッコ」と呼んで種族名となったものである。もともと大陸に根拠を持った種族で馴鹿（トナカイ）を飼い水草を追って移動生活する遊牧民であり、性質はギリヤークより粗くして強く、風俗はだいたい大陸のツングースとかわったところはなく、衣類は毛皮魚皮を用い、木の皮を工作して生活用具を作り、また精巧な彫刻模様の技はアイヌよりも優れている。写真には馴鹿（トナカイ）がみられないが、馴鹿と一緒の生活のため、ツンドラ地帯を離れることが出来ず、北緯50度以南の国境付近（敷香（シスカ））に止まったものであろう。カラフトの呼び名もこれらの種族名がおおいに影響しているのは北方研究者の発表でも明らかである。

樺太は海産物特に鮭や鱒が豊富で春秋にはこれらの魚で川が埋まる程であった。写真後方に見えるのは鱒の肉を干して冬期の食料として備えるための乾棚であり、昭和初期の写真で貴重な一葉である。

小屋はテント小屋で内部は柱なしの家で地面を浅く掘りおこして竪穴のごとくし屋根は木の皮でふいた。和人のオガミ小屋に類似したものであると思われるが、移動する事を考えてのものか。

（納谷忠久）

附　記

最近縄文時代の住居を復元する試みが各地で行われている。しかし縄文時代の住居がそのままの形で残っていた例がなく、わからない点が多い。例えば屋根の材料に何を使ったのか、はたして茅ぶきなのか。今でこそ大木囲貝塚は茅の原になっているが縄文時代には茅を得るのは容易ではなかったのではないか、どうやって茅を刈ったのか……。

納谷氏の「オロッコの家族と小屋」は縄文時代の住居や生活を考える上で貴重な資料であり、特に寄稿していただいた。

（八巻正文）

あ と が き

史跡大木囲貝塚の北東部に沼がある。ここは昭和の初めまで入江となっていたが、その後埋立てが進み、史跡買上げ以前は一部水田に使われていた。最近は沼に汚水が流れこんでいる。そこでこの汚水が沼に入らないようにし、埋没している可能性のある丸木舟をはじめとする縄文時代の浜辺の遺構・遺物を保存するため、史跡境界に築堤する計画である。さらに築堤上に植栽し景観も改良する。この築堤の設計資料として、今年度東北ボーリング鑿泉株式会社に委託して沼地の境界線にそって地質調査を行った。

その結果、深いところで岩盤までは約7mあることが確認され、築堤するには少なくとも15,000,000円の費用がかかることが明らかとなった。各年度の予算総額から言って築堤はしばらく延期せざるをえない。

遺構確認調査は予算が不足し、町費で補っていただいた。資料の整理は第一次資料整理（遺物を洗浄し、遺物の一つ一つに出土した地区層名を記入する）だけはどうにか終了させ、あとで誰でもがその資料を使えるようにしておこうと努力した。ただ予算の都合もあって、さらに土器ならできるだけ接合復元し、分類整理し、諸要素を分析・総合し考究し報告するまでには至らず、この報告書ではごく一部の完形品を紹介したにすぎない。

「II、中世の貝層」は、たとえ縄文土器しか含まれていなくとも、それを含む土層がずっと後になって形成されている場合があり、珍しい遺物・遺構が出土した場合には十分注意する必要があるので特にとりあげた。

「IV、第2号住居跡」は、未発掘の部分を残してはいるけれども、大木囲貝塚としては初めての住居跡の正式の報告である。

「X、オロッコの家族と小屋」は、復元住居計画の参考資料として寄稿していただいた。

「VII、鳥骨」「VIII、魚骨」は、調査参加者の基礎知識として必要である。

「IX、石器、石製品」については、小生これまでほとんど研究経験がなく、千葉英一君に整理・報告していただいた。

末筆ながら関係職員のかたがたの協力に対し、深甚の謝意を表します。

（八巻正文）

引用文献

アルファベット順に並べた。著者名のローマ字は訓令式を使用した。

赤崎正人　1962（昭和37年）タイ型魚類の研究　京都大学みさき臨海研究所特別報告1　327pp.

George, C. Kent　1973（昭和48年）Comparative Anatomy of the Vertebrates third edition　414pp. The C. V. Mosby Company, Saint Louis.

疋田豊治　1934（昭和9年）北日本産鰈類　水産研究彙報4　pp.187－296、pls. 1－30

福田友之　1973（昭和48年）史跡　大木囲貝塚環境整備調査報告書Ⅰ　七ヶ浜町文化財調査報告書Ⅰ　25pp. 3pls. 宮城県七ヶ浜町教育委員会

川村久治郎　1914（大正3年）「まだひ」の解剖　水産研究誌9（6）pp.261-304　水産同窓会　東京

金　容億　1973（昭和48年）Comparative Osteology of the Right-Eye Flounders, Subfamily Pleuronectinae Fishes 釜山水産大学臨海研究所研究報告6　pp. 1－38

日本大学水産学会　1958（昭和33年）水産動物解剖図譜　pp. 112-118　日本大学農獣医学部水産学会　東京

Romer Alfred Sherwood and Parsons Thomas S.1977（昭和52年）The Vertebrate Body fifth edition 624pp. W. B. Saunders Company, Philadelphia

上野輝彌　1975（昭和50年）魚類　新版古生物学Ⅲ　pp. 181-242　朝倉書店　東京

謝　　辞

本調査は国指定史跡大木囲貝塚の昭和49年度環境整備事業の一部をなすものであり、国庫補助、県費補助を受けた。

東北大学文学部考古学研究室からは多くの文献を見せていただき、多くの器械を拝借した。

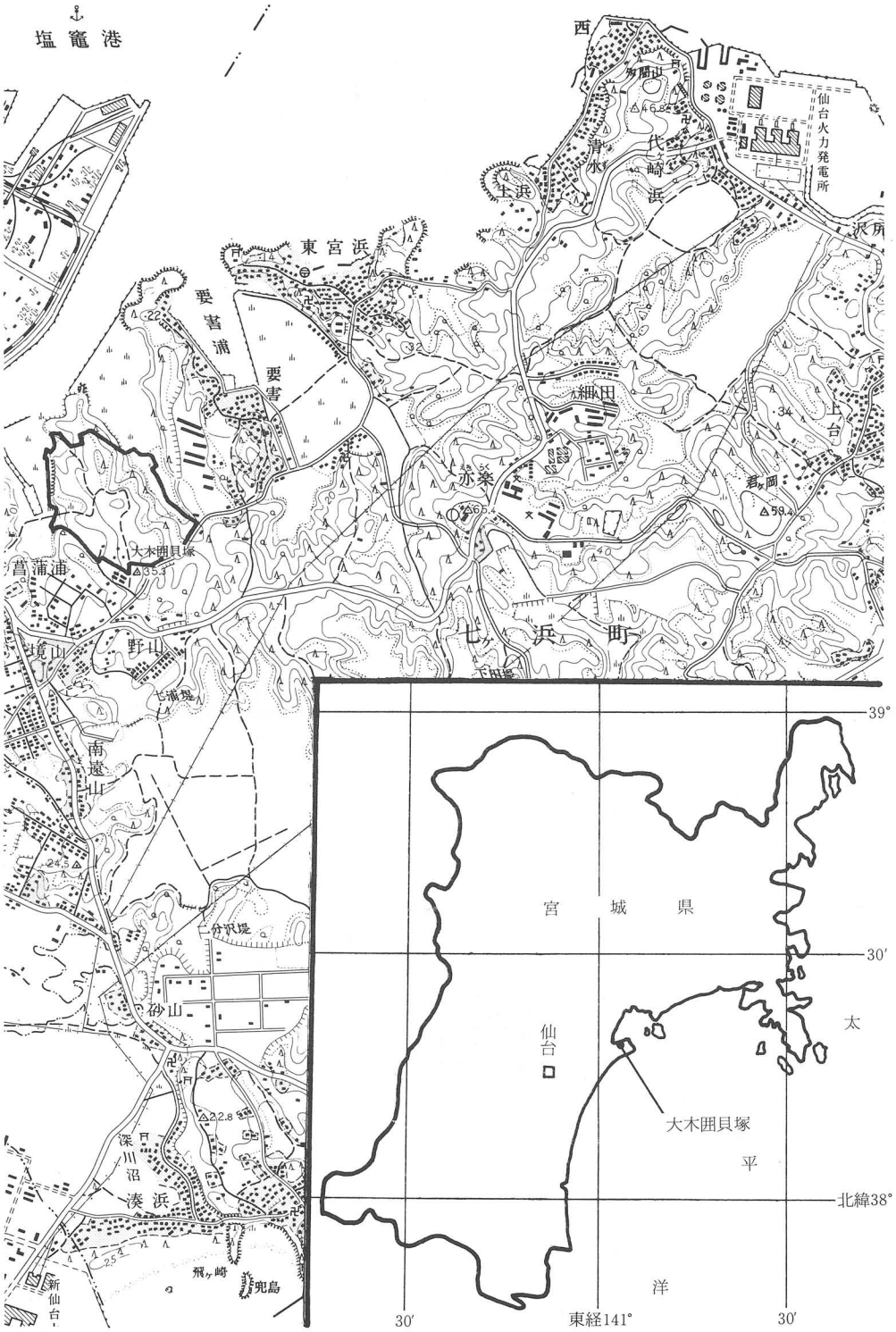
魚骨の整理にあたっては次のかたがたより指導助言を賜わり、貴重な文献を拝借した。
東京水産大学　石山礼蔵教授
水産庁東北区水産研究所　佐藤重勝所長　堀田秀之博士　小達　繁氏
東北大学農学部　佐藤隆平教授
北海道大学水産学部　尼岡邦夫博士
水産庁東海区水産研究所　阿部宗明博士

四肢動物、鳥骨の整理にあたり、国立科学博物館の長谷川善和先生に指導助言を賜わった。

C－14年代測定では、東北大学理学部小元久仁夫先生の協力・指導を賜った。

図のトレースには宮澤真弓嬢を煩わした。

（八巻正文）



1：25,000　建設省国土地理院承認済〔承認番号〕昭47，第6568号

図版Ⅰ　大木囲貝塚の位置　2万5千分の1地形図黒線内が史跡指定区域　（八巻　正文）

埋蔵貝層地域

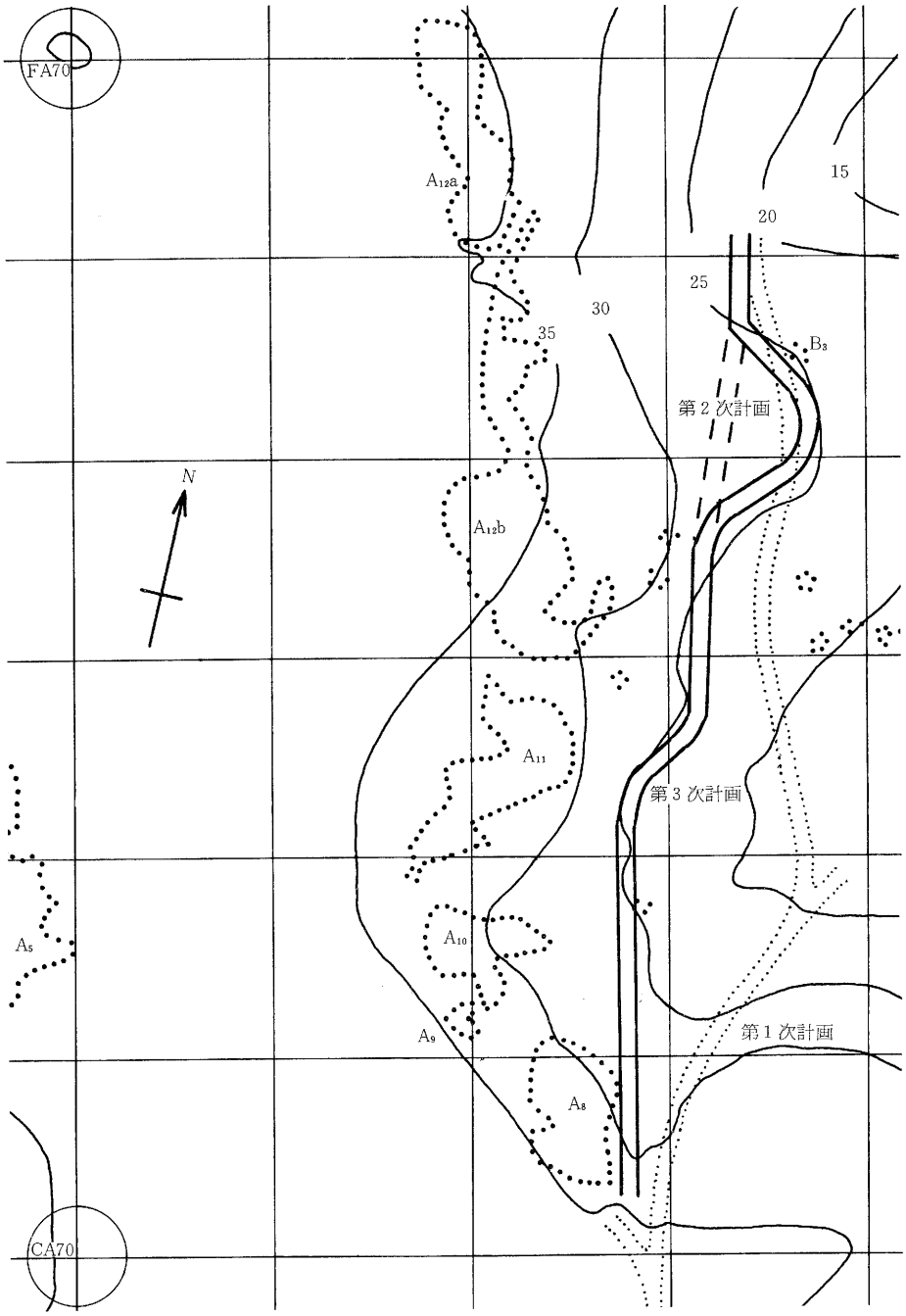
試掘地区

0　30m

地区設定のための中心石標

図版Ⅱ　昭和49年度調査地区図

（八巻　正文）



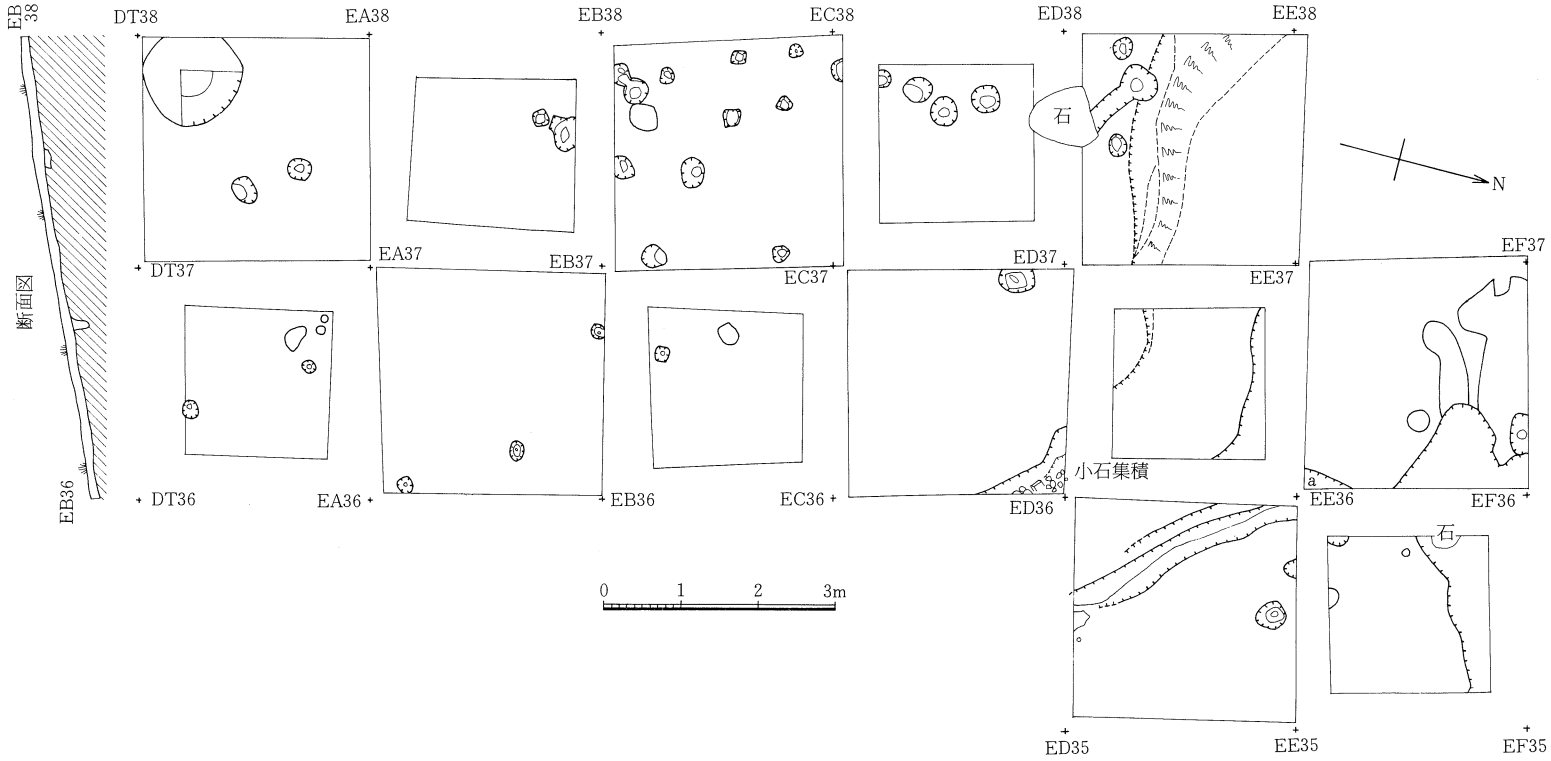
埋蔵貝層地域

0　30m

地区設定のための中心石標

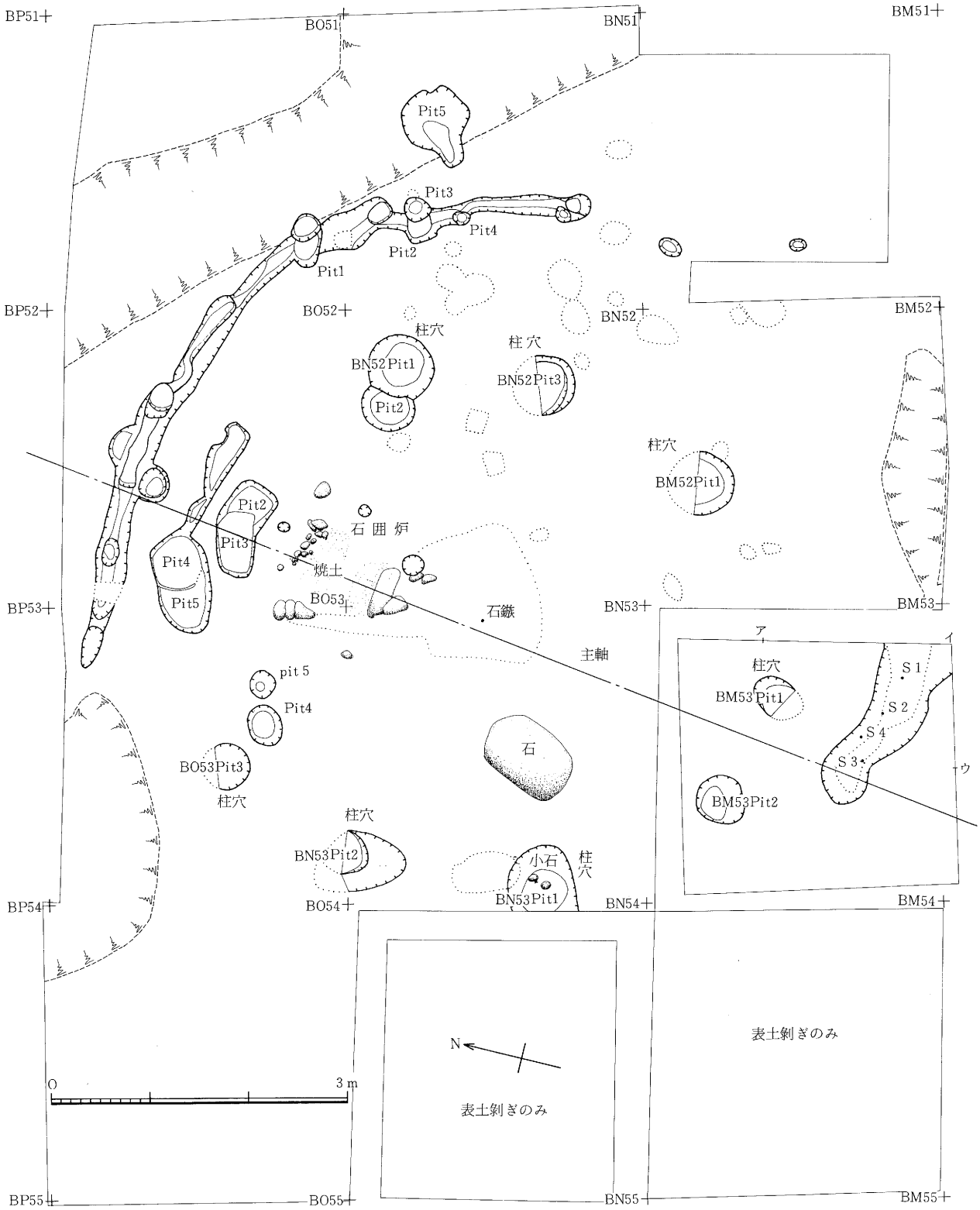
図版Ⅲ　苑路線の変更

（八巻　正文）



図版Ⅳ　小舌状台地上の小穴群
輪郭のみ図示してある部分は地山とちがう土の部分で未発掘

（八巻　正文）

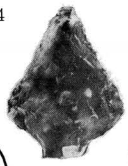


図版Ⅴ　大木囲貝塚第２号住居跡　（八巻　正文）

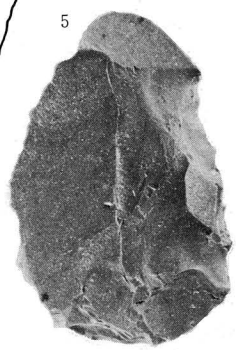
1

2

3



4



5

6

7

8

1．第２号住居跡(東方から西に向かって撮影)　2．BN53L２出土 大木９式土器×1/2　3．BN53L２出土 石鏃×１
4．BM53L２出土S.1石鏃×１　5．BM53L２出土S.2スクレイパー×１　6．BM53L２出土S.3石鏃×１
7．BM53L２出土S.4石斧×１　8．石囲炉(BO52区)北方からBO52－BO53の土層断面を撮影

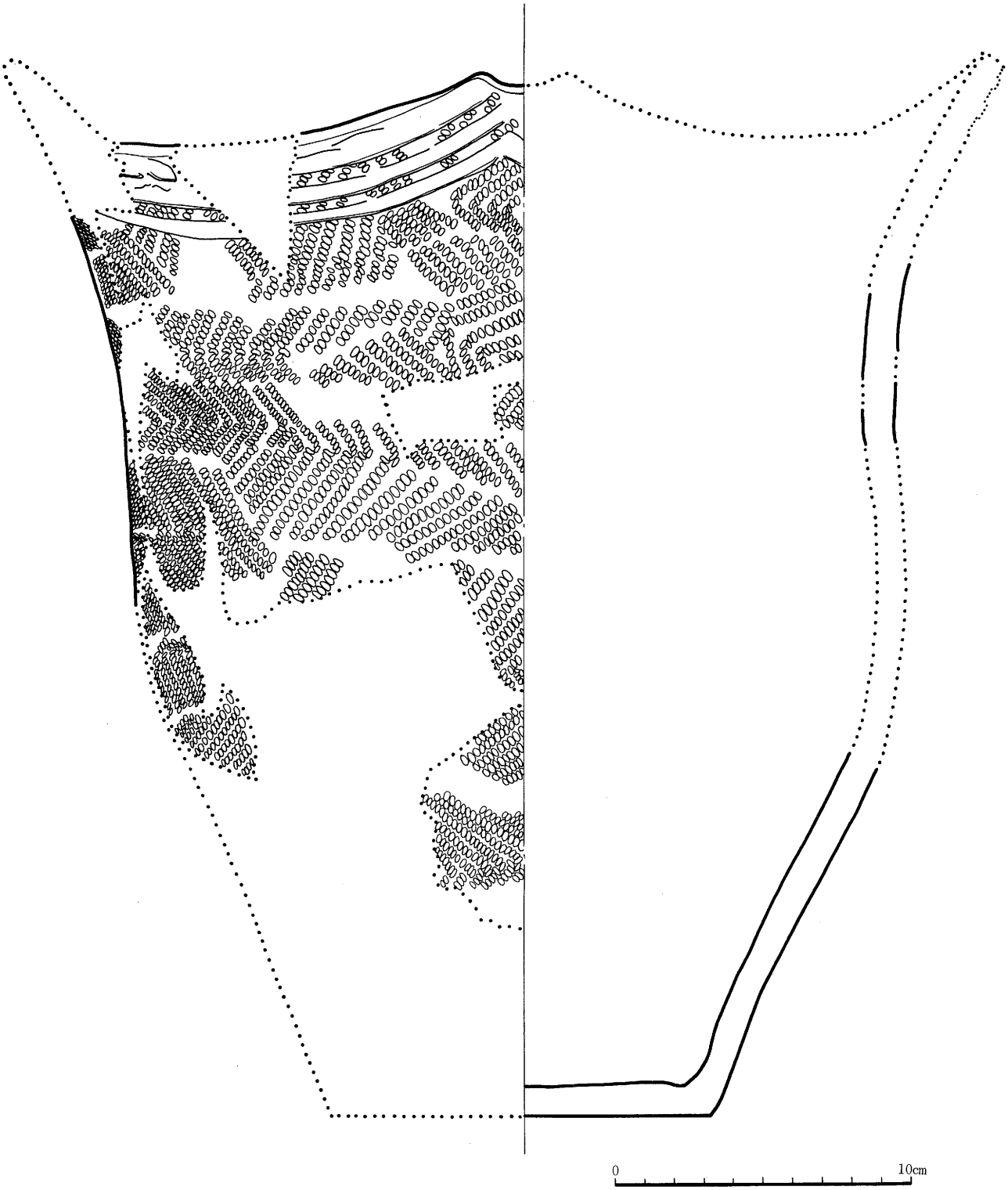
図版Ⅵ　大木囲貝塚第２号住居跡及び住居跡出土遺物　(八巻　正文)

A. 標識を立てる穴を堀る
柱の太さとほぼ同じ大きさに掘る。

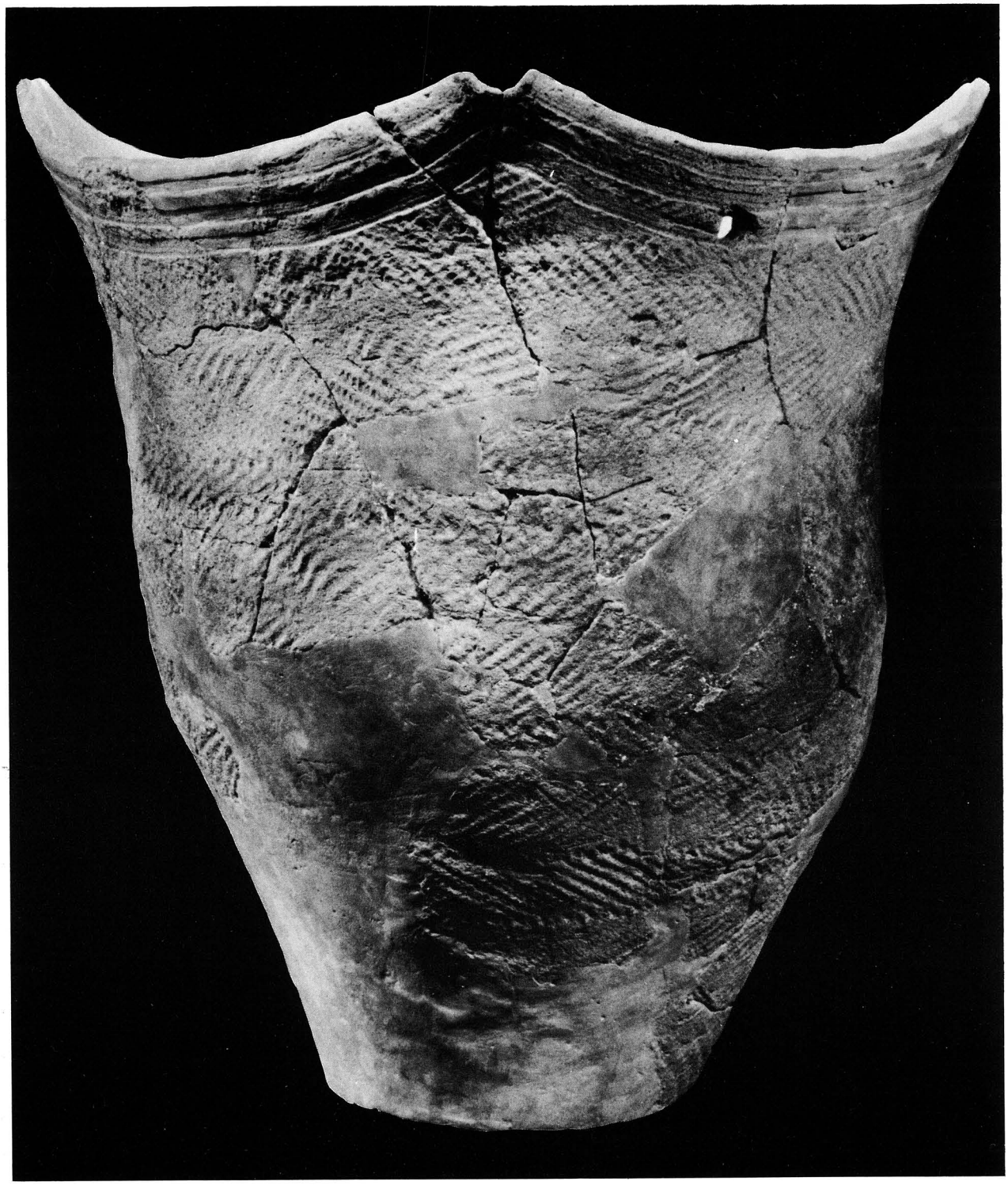
B

C

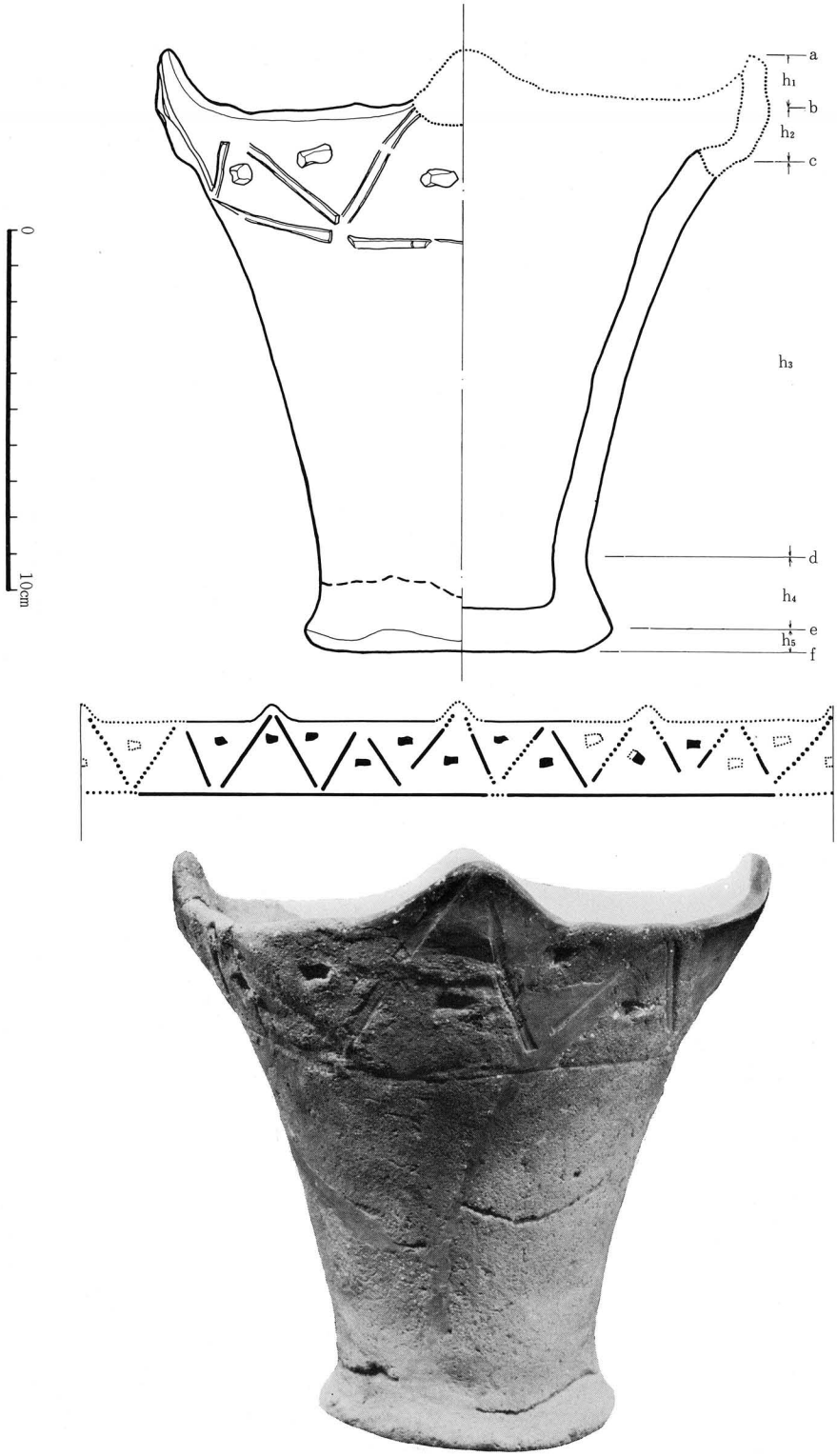
図版Ⅶ　手作りの標識　　（八巻　正文）



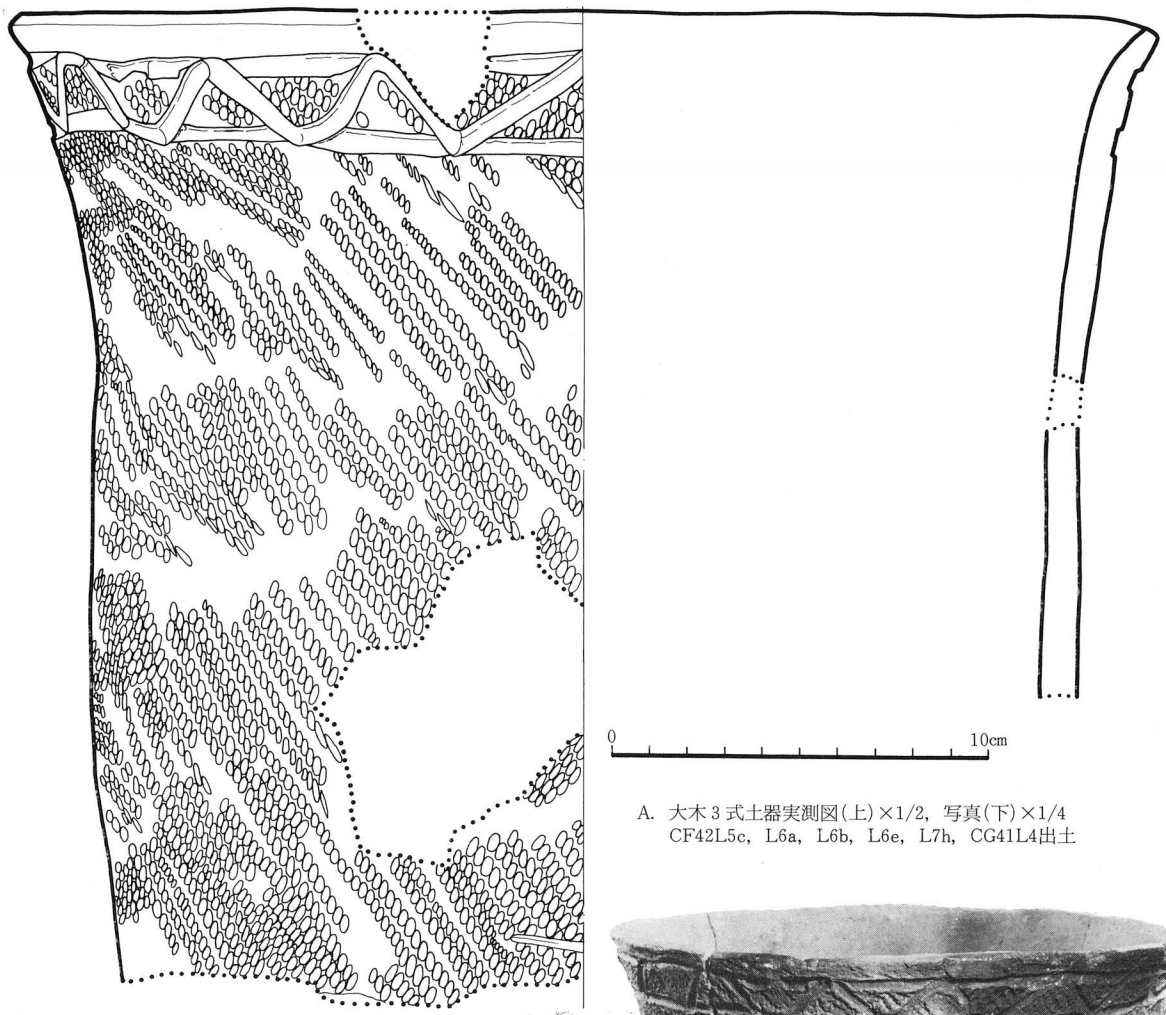
図版Ⅷ　大木２式土器　BK59L Ⅰ，L２出土
点線の部分は欠失した部位を示す　　×１/２　（八巻　正文）



図版Ⅸ　大木２式土器　BK59L Ⅰ，L２出土 ×1/2　　（八巻　正文）



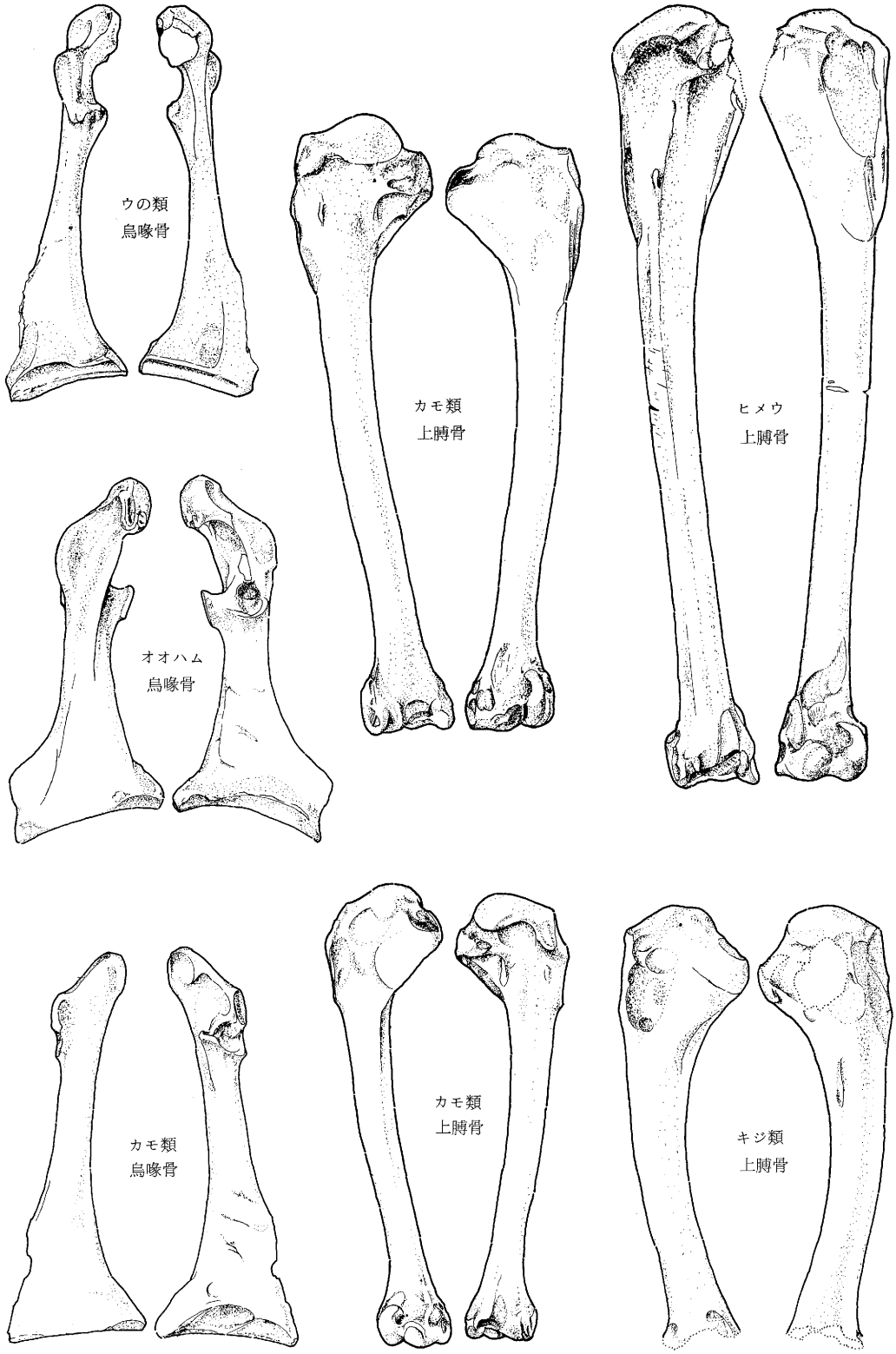
図版X　大木３式土器　CF42L4a，L5b出土，破線より下の底部がL5b出土上より実測図，文様配置図，写真×1/2　（八巻　正文）



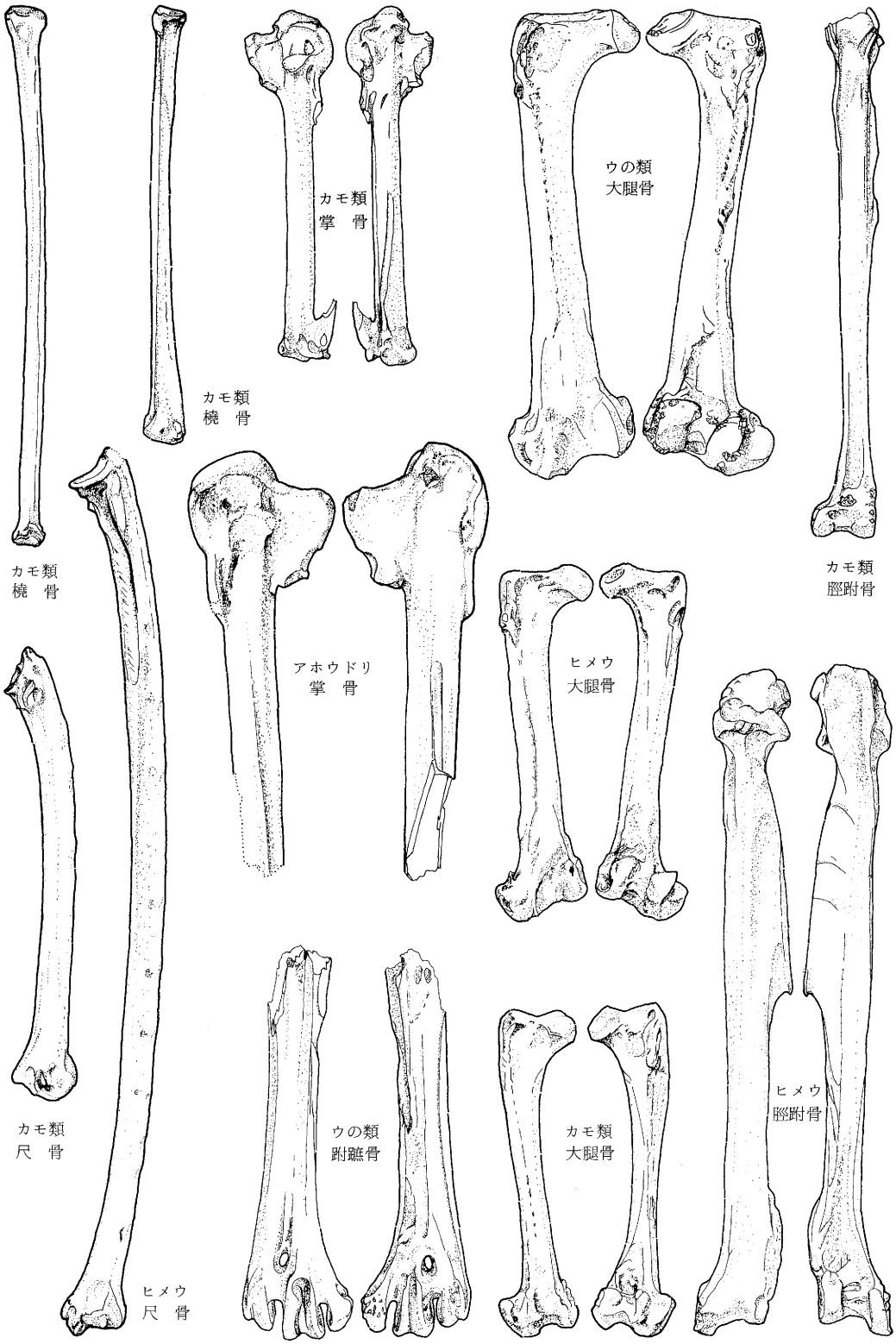
A. 大木３式土器実測図(上)×1/2，写真(下)×1/4
CF42L5c，L6a，L6b，L6e，L7h，CG41L4出土

B. 大木２式期の土偶，写真及び断面図
BK53L2出土 ×1/2

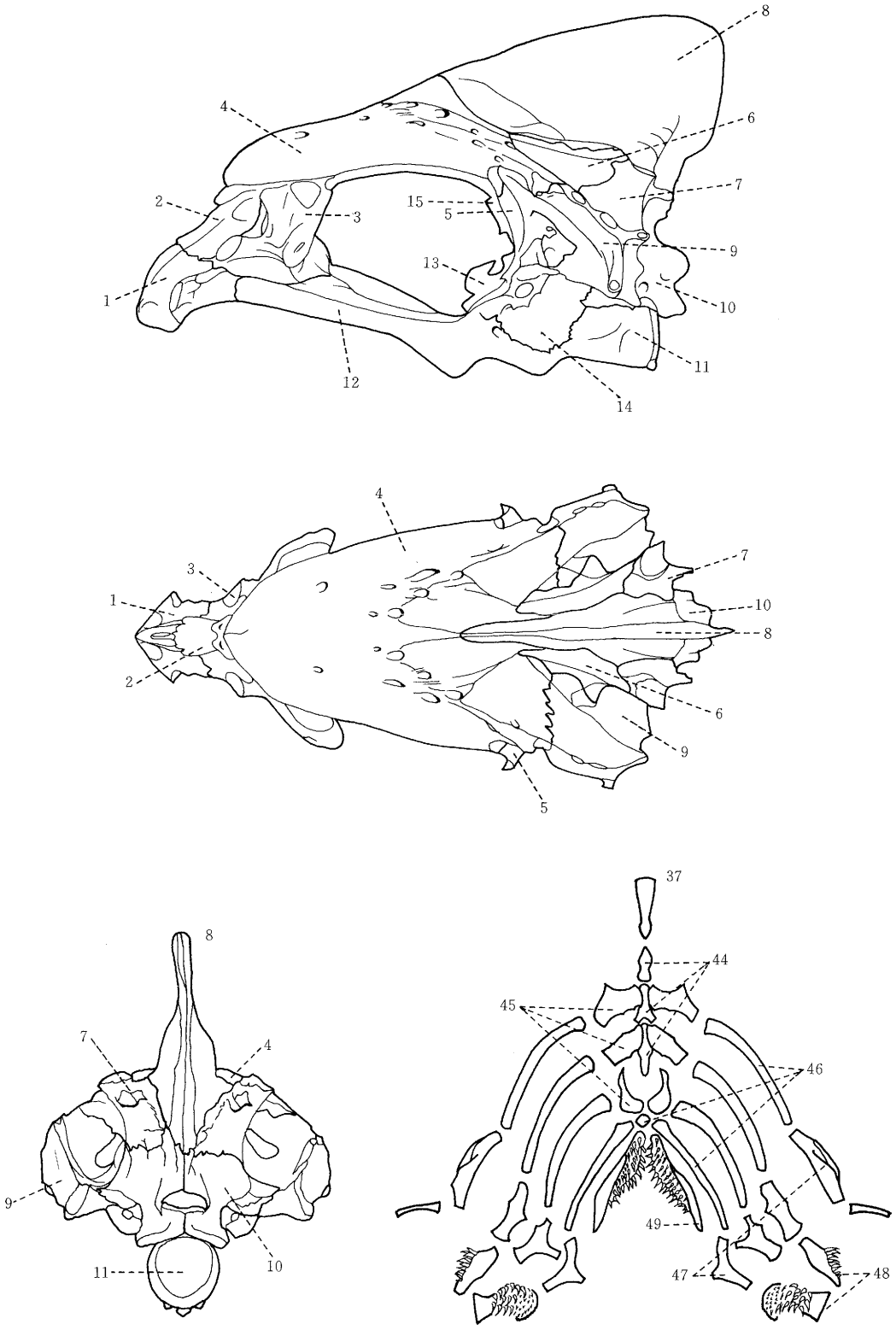
図版XI　大木３式土器及び大木２式期土偶　　(八巻　正文)



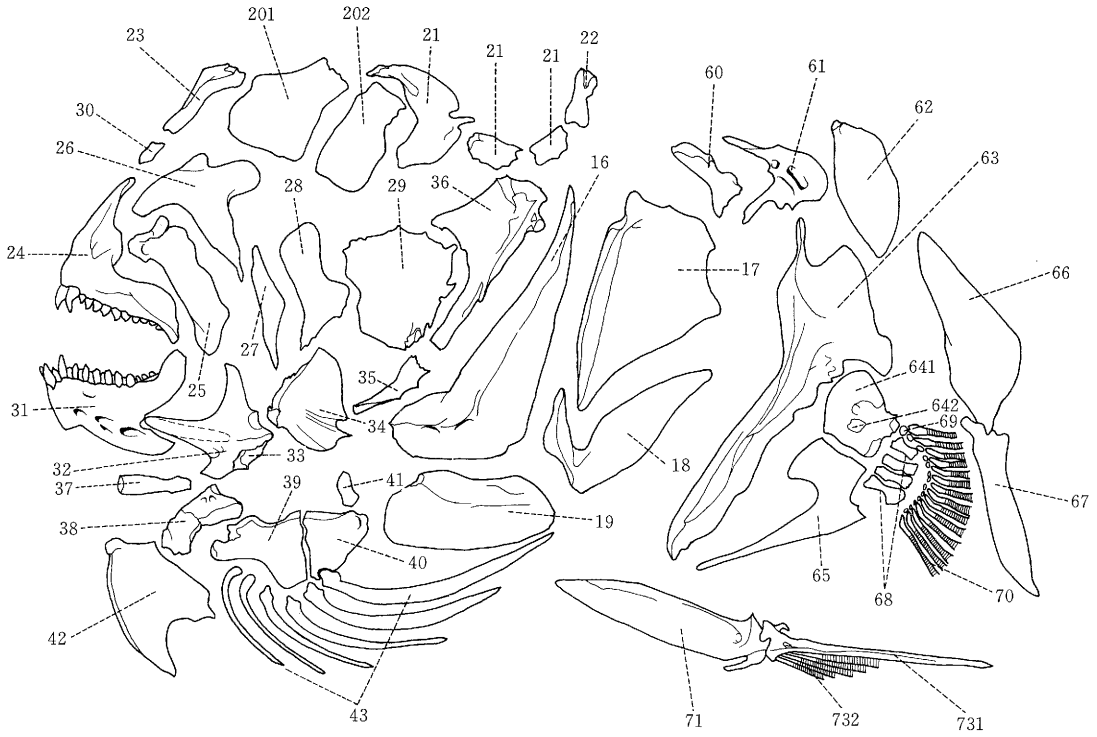
図版XII　大木囲貝塚出土の鳥骨 ×1　　（八巻　正文）

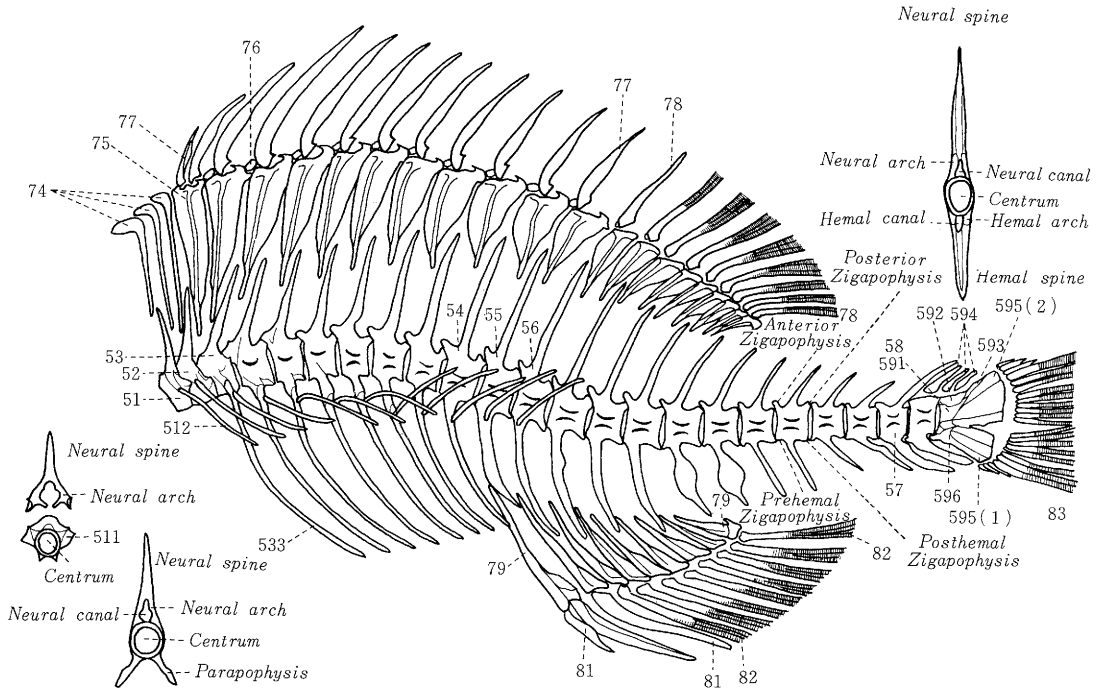


図版XIII　大木囲貝塚出土の鳥骨 ×1　　（八巻　正文）

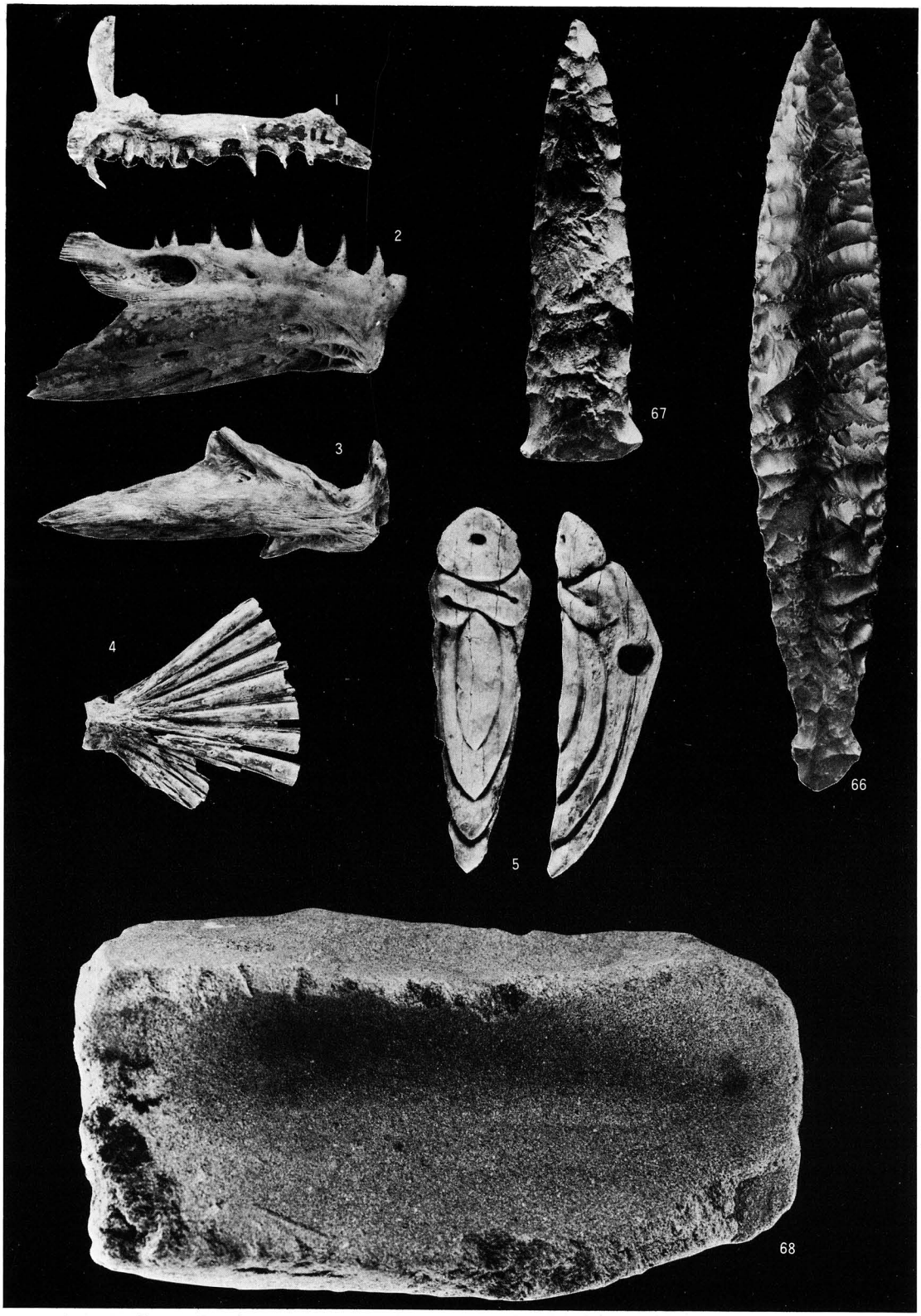


図版XIV　マダイの骨格　　（八巻　正文，阿刀田裕子）





図版XV　マダイの骨格　　（八巻　正文，阿刀田裕子）

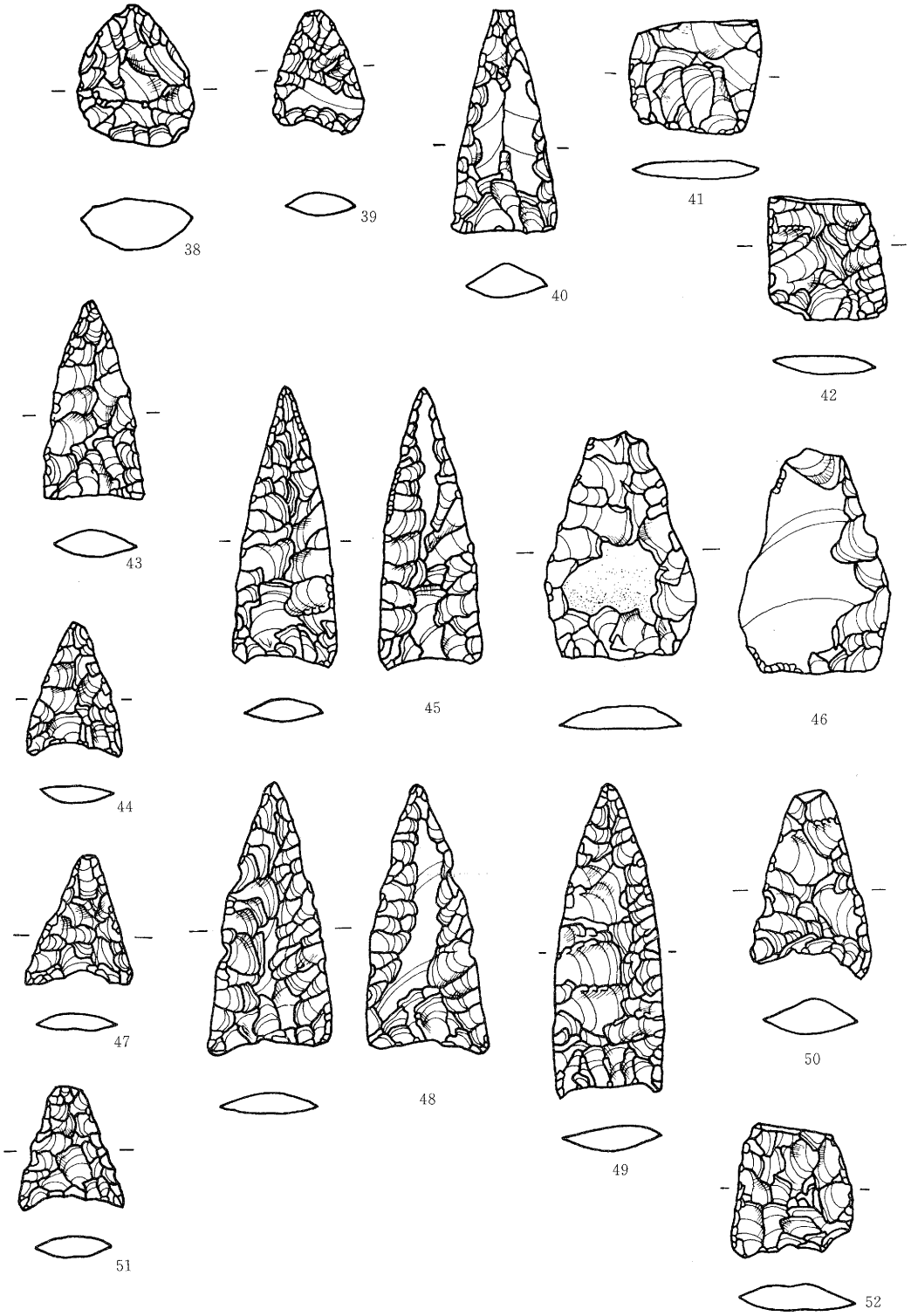


1．ヒラメ*Premaxillary*右×1　2．ヒラメ*Dentary*右×1　3．ヒラメ*Angular*左×1　4．ヒラメ*Hypulal*×1
5．鹿角製装身具DD38L 2 出土　伴出土器は縄文時代中期後期×1　66．石槍BM54L 1 出土×1
67．石槍CF42L4c出土×1　68．石皿DP38L 4 出土×1/2

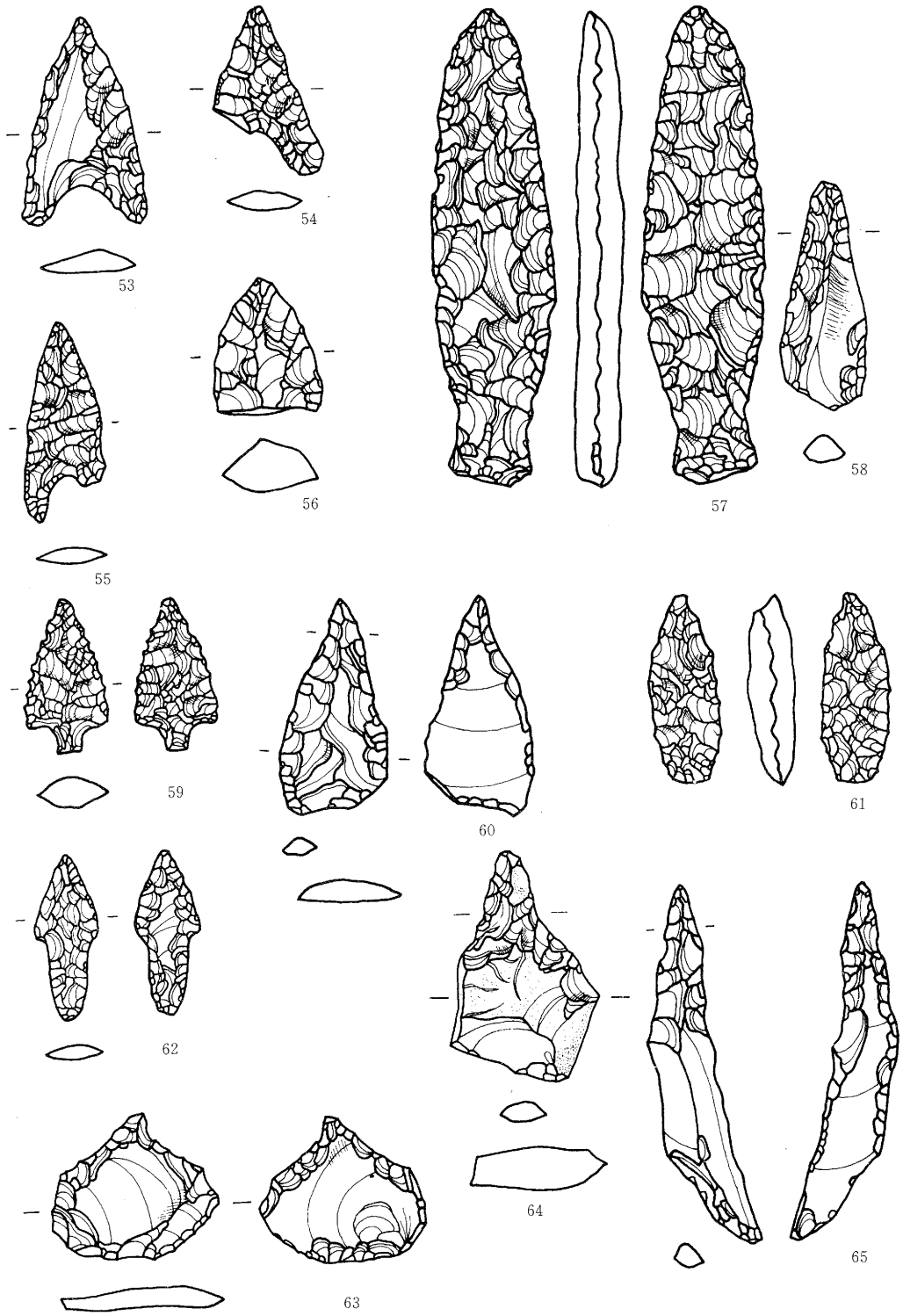
図版XVI　大木囲貝塚出土 魚骨，角骨器（八巻正文），**石器**（千葉英一）

図版XVI　大木囲貝塚出土石器実測図　×1/2　（千葉　英一）

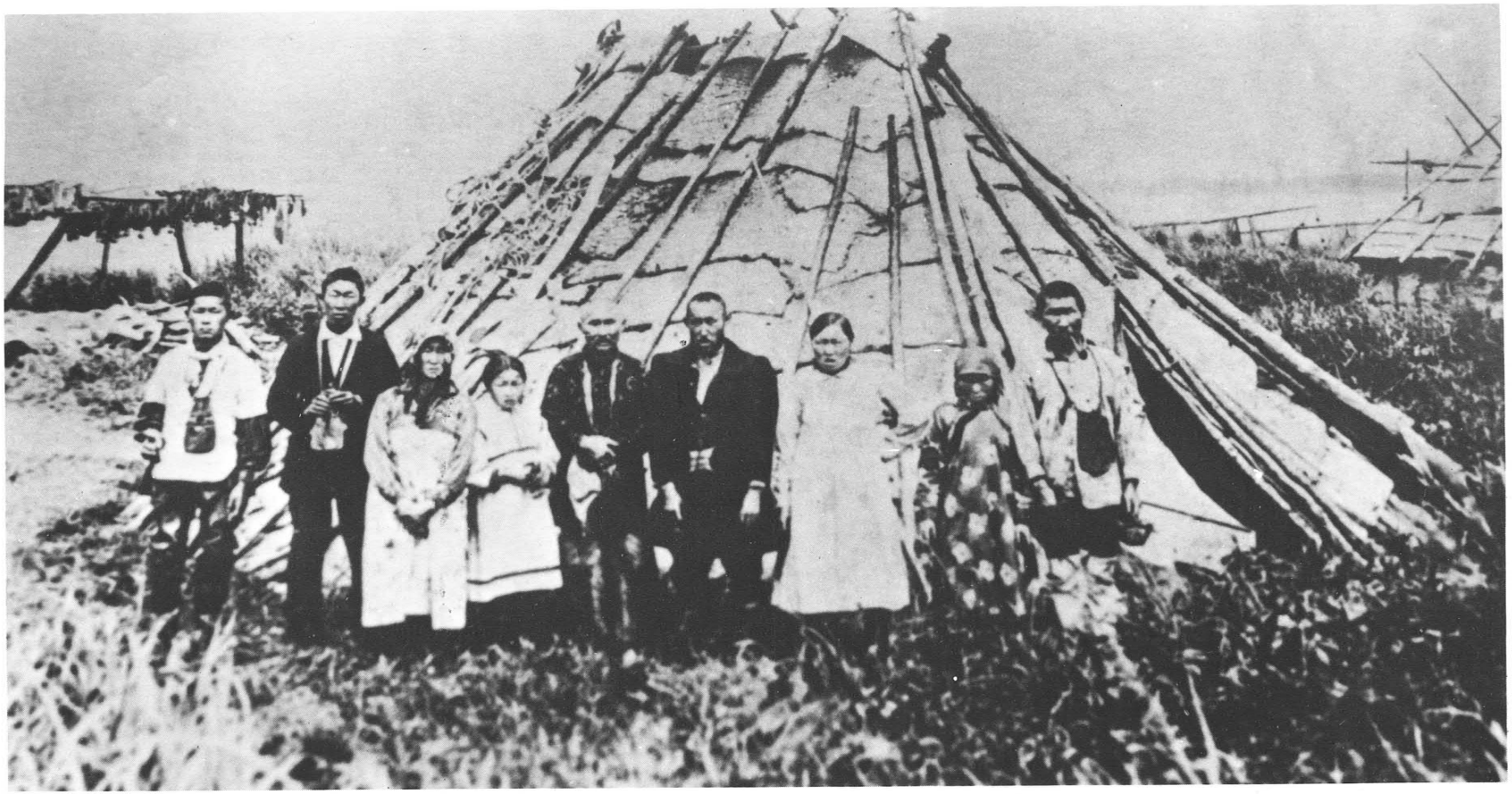
図版Ⅻ　大木囲貝塚出土石器実測図　×1/2　（千葉　英一）



図版XIX　大木囲貝塚出土石器実測図　×1　（千葉　英一）



図版XX　大木囲貝塚出土石器実測図　×1　（千葉　英一）



図版XXI　旧日本領樺太付近のオロッコの家族と小屋　（納谷　忠久）

七ヶ浜町文化財調査報告書第３集

大　木　囲　貝　塚

―昭和49年度環境整備調査報告―

昭和50年３月20日印刷

昭和50年３月31日発行

発行　七ヶ浜町教育委員会

宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字丑谷部５－１

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市立町24－24　電話（25）６４６６